

---

# 月追鳥

三衣 千月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月追鳥

### 【Nコード】

N4799BA

### 【作者名】

三衣 千月

### 【あらすじ】

・mixiで書いた日記からお引越し。

ある新月の夜。

星座観察に出かけた山奥で偶然出会った奇妙な鳥。

鳥は月を追っていると言う。

それ以外に何も無いという。

月が満ちるまでの短い期間を共に過ごす中で生まれる

小さな対話の中で互いの中に少しずつ生まれる  
確かな変化の物語。

## 闇夜のささやき

分厚いコートに身をくるみ、大きく一つ息を吐いてみると、  
ゆらりゆらりと消えていく吐息の先に、ちかちかと煌めく星が  
夜の海を所狭しと埋めているのが見えた。

どこかの詩人が、星の瞬きを「星のおしゃべり」と例えていたのを  
ふと思い出して、決して自分には無いであろうその感性に対して  
僅かばかりの嫉妬と素直な感動を覚える。

今夜は特に「おしゃべり」がよく聞こえる。  
檸檬色に妖しく浮かぶ夜の公爵様は出てくる気配を見せない。

「・・・なあって。な。」

詩的な気分もいいが、今日は折角の新月だ。  
私的な欲求に従ってわざわざこんな山中に赴いたのだ。  
知的に興味の天体観測と洒落込もうじゃないか。

車のヘッドライトが無ければ辺りは本当に真っ暗だ。  
民家の明かりも街灯さえもない。  
少し自宅からは遠いがここは天体観測には絶好の場所だ。

野原の脇に停めてある車のトランクから一式の準備を取り出して  
エンジンを切る。

ヘッドライトが無くなると辺りは一面の闇に覆われた。  
月明かりも無いので手探りで荷物の中から懐中電灯を探し当てて  
スイッチを入れて作業用の明かりにと首から下げる。

天体望遠鏡を置くために地面を踏んである程度平らにし、  
赤道儀を設置して、微調整の為に手袋をはずすと  
冬の尖った空気が肌を刺した。

「うわ。痛いくらいに冷たいな。」

呟いた言葉に返ってくる言葉は当然ながらない。  
こんな冬空に一人でこんな事をしていてというのは  
冬の空気よりも痛いことだろうか？  
・・・あまり気にしないことにしよう。

それより天体観測だ。

冬の夜は気温が低く空気中の水分量が少ないので  
透過性は高いが、やはり寒い。という当たり前すぎる一面もある。

「やっぱり寒いな……。」

だが、どうしようもないのもまた事実だ。

手始めに南方のオリオン辺りに照準を合わせ、赤道儀が低くモーター音をあげだした事を確認した後、リモートを持って用意したパイプチェアを開いて腰を下ろす。

あとは数十分もカメラのシャッターを開いておけば天体写真の完成だ。

ぐ、と伸びをする要領で後ろに倒れ込んでそのまま月明かり不在の星空を眺める。

「確かに星のおしゃべりとはよく言ったもんだ。」

夜空の海一面に広がる星は常に視界のどこかで誰かが囁いている。

紺碧の空はざわざわとした静寂で満たされていた。

目を閉じると星の囁き声が聞こえてきそうな気にさえなってくる。

今夜はいい塩梅だね

ああ、いい塩梅だね

いやはやしかし僅かばかり長く飛びすぎたようだ

なに、夜はまだまだ長い。羽休めなどしてはどうか

そう。こんな具合に。

こんな具合・・・？

なんとも不思議な会話が耳に残る。

羽休め？飛ぶ？

なんの話だ？

と、いうより誰の話し声だ？

むくりと起き上がり閉じていた目を開ける。

周りに誰か先客でもいたのだろうか？  
しかし、闇に慣れ始めてうっすらと見える視界の中に  
誰の姿も確認することは出来なかった。

「・・・？」

気のせいか。とまたパイプチェアに体を預ける。

『ごきげんよう。アナタは何をする人か。』

「!？」

意識外から掛けられた声に心底驚いて飛び起きると  
パイプチェアがやたら大きな音をたてた。

辺りを見回すが、やはり誰の姿も見えない。  
なんだか薄気味悪い。こんな怪奇現象の類いは正直好きではないの  
だ。

出来るだけ関わり合いにもなりたくないし、懇意になど以ての外だ。

幽霊か、はたまたお化けか悪霊か。



自分の心臓の音がやけに煩く、先程まで澄み渡っていた空気は粘着性のあるそれへと性質を変えていく。吐き捨てる息ですら、白く意思を持って動いているかのように錯覚してしまう。

赤道儀の低いモーター音だけが聞こえ、それがやけにはっきりと耳の中でこだまするような感覚に陥っていた。

『すまない。驚かすつもりはなかったのだが……。』

再び、声ははっきりと聞こえてくる。間違いなく、自らに向けられた声だ。

恐る恐る、声のする方へと体を向けると望遠鏡の上に一羽、鳥のようなものがある事に気がついた。

鳥のようなもの。

そう、辺りの闇の所為で羽らしきものが確認できただけだからだ。

「・・・鳥？」

羽ばたきの音はしなかったが。

いや、それ以前に鳥が喋ると思えない。

やはり怪異の類だろうか？

全身は未だに警戒信号を発したままだ。

『そうだな。鳥に近いと思われる。』

鳥のようなものは続けた。

『月を追っていたら飛び疲れた。しばし休もうと思つてな。』

どうやら本格的に鳥らしい。

いや、鳥か？鳥なはずはない。

少なくとも俺の人生の中でこんな鳥は見たことがないし聞いたこともあるはずがない。

『そう、強張らないでいただけるとありがたい。それに……。』

羽をもそりと動かした……ような気がする。

『こんな山奥で一人寝転んでいる方が変ではあるまいか。』

確かにそれはそうかも知れないが、しゃべる鳥に常識を語られるのはいささか心外だ。

ともあれ、何とか落ち着きを取り戻しつつある……と思いたい。こんな騒動になると誰が予想出来ただろう？

俺は単純に星を見て写真を撮りたかっただけなのだが。

「あつ。」

落ち着きを取り戻してきたお陰で、何かと気がついてきた。手に持っていたカメラのリモートが見当たらない。

あつた。

望遠鏡の近くにころりと落ちている。

「ああっ！」

『何やら騒がしいな。如何なされたか？』

「そこ！そこ退いて！」

『？』

今気づいた。いや、見えてはいたがそこまで  
思い至らなかつたという方が正しいだろう。

鳥が、あるうことが望遠鏡の先端に止まっているではないか。

「そこ！その場所！照準がズれるからそこを退いて欲しい。」

『ほう。すまなかつた。するとこれは鉄砲か何かであろうか。』

鳥が音もたてずに筒の先から降りてそう言った。

人語を介すくせに望遠鏡を知らないとは……。

随分と対応に困る物言いをする鳥だ。

間の抜けた返答に、こちらの警戒は完全に解かれてしまった。

どうやら、害意のあるものではないらしい。

安堵したせいか、冬の刺すような空気がまた体を覆い始める。

「鉄砲じゃない。」

それより、何者？お前。」

倒れたパイプチェアを起こしながら聞いてみる。

何だか天体観測などという気分では無くなってしまった。

『何であろうな。』

「へ？」

『気づいた時には月を追っていた。』

「いつからっ？」

『はて。』

「何で？」

『なに。』

全く以て要領を得ない返答に半ば呆れてしまう。  
それと同時に、この鳥に少なからず興味を覚えた。

じっくり話を聞いてみようと思い、闇に佇む車のトランクから  
ランタンとバーナー、それとケトルを取り出して  
地面にトンと置き、湯を沸かす準備を整える。

体が冷えて来たのでコーヒーでも飲みたい所なのだ。

カチリ

ランタンの仄かな暗燈色が地面を照らすのと同時に、  
鳥らしき相手の輪郭が写し出された。

やはり、鳥のようだ。

尾羽根に二本程、長い紐のように垂り尾がのびている。

『気になるか?』

「ん？」

『私が何であるかが気になるか？』

淡々と鳥はしゃべる。

「興味はあるな。」

何しろ、喋る鳥だ。

それ以外は分からない事だらけだが、それだけで興味は十分にひくというものだ。

鳥は何やら考え込んでいるのか黙りこくってしまい、たまにぴくりと頭を動かすような素振りを見せた。

湯が沸き、熱いコーヒーを啜っている間中ずっと鳥は同じような動きをして見せていた。

コーヒーの湯気と白い息が混ざりあって夜空に溶けていく。もう、何分そうしていただろうか。

突然、

『やはり、ないな。』

と呟いた。

『やはり、先刻の言葉以外に私を表す言葉はない。』

『私は、月を追っているのだ。』

それを聞いて、目の前の不可思議な光景よりも、この鳥の日常を感じてみたいとさえ思っていた。

この鳥は、ずっと飛んでいたのだろう。

こちらが何気なく過ごす日常とは別の日常をただただ夜空の中でそれを日常としておくってきたのだ。

ふと、ある考えが頭をよぎった。

目の前にいる鳥に月を見せるとどうなるのだろうか。



月を追っている鳥が月に追い付いたらどうなるのだろう。  
考えついたその結論に今は答えが出せないが、  
果たして。

そう思ったと同時に、

「月、見せてやろうか？」

と言葉が口をついて出ていた。

はたと鳥が動きを止める。  
ランタンの灯だけがゆらりと揺れた。

『一緒に追ってくれるのか？』

「いや。」

一呼吸おいて、続けた。

「一緒には飛べないが、待ってれば半月程で見れるかな。」

次の満月まで待てば、自ずと結果は分かる。  
自分の中の知的好奇心がぐいぐい膨れ上がるのを  
寒さが気にならないほどに感じていた。

『それはおもしろい。アナタに興味も湧いてきた所だ。  
ご一緒してよろしいか？』

「ああ、喜んで。しばらくはウチに来るといい。」

幸い、一人暮らしなので鳥が一羽増えた所で特に困らない。  
満月までの短い間だが、ちよつと変わった同居人が出来た。  
ただ、それだけのことだ。

帰り支度を整えて、風変わりな同居人を連れ帰る事にした。

『11月に住んでいるではなかったのか。』

「あはは、別の処にねぐらがある。普段はそこで暮らしてるよ。」

『ならば、一期一会。というやつだな。』

「ふふ。ああ、そうだな。」

『何を笑っている？』

「や、何でもない。」

なんともまあ、モノを知っているのか知らないのか  
分からないやつだ。

ますますこの鳥に興味が湧いてくる。

車を家に向けて走らせながら何となくだが明日からの日常が  
楽しいものになりそう予感がしていた。

満天の空ではまだまだおしゃべりが続いている。

満月まで、あと二週間。

## 尖月が輝く前に

月日は否応なしに過ぎ行くものであり、  
降車できない列車のようである。

・・・誰の言葉だったか。  
みな、共通の終着駅に向けて一様に進むだけなのだと、  
どこかの哲学者が言っていた。

通過する駅が人によって違うだけなのだと。

ならば、俺はずいぶんとユニークな駅を通ったことになる。

昨夜の晩に連れ帰った珍妙な同居人は窓際の棧にとまって  
こちらを眺めていた。

目が覚めても消えていないところをみると、  
やはり夢でも幻でもないようだ。

視界には長い二本の垂り尾を持つ濃紺色の鳥がじつと居座っている。

その体色は朝を迎えた空にぼつんと落ちた夜の欠片のようだった。

「・・・おはよう。」

若干、まだ心のどこかで現実だとは認識出来ていないのかも知れない。

少し遠慮がちな朝の挨拶になってしまったが、

そんな事は意にも介さないかのように鳥は言葉を返してきた。

『ごきげんよう。これが朝、というものか？』

窓からは冬の日差しがゆるやかに差し込んでいる。

随分日が高いようなので少し寝坊気味な時間なのかも知れない。

無理も無いだろう。

昨夜は帰宅した後にこの鳥と随分と語り明かしたのだ。

いや、語り明かしたという表現は正確ではない。

時間の殆どは俺の説明の時間だったように思う。

自分と違う日常を過ごしてきた存在なのだと理解したつもりだった。

何せ、しゃべる鳥だ。確実にこちらの常識や日常は通じないと覚悟していたが、その斜め上仰角45°をいかれた感じた。

日付や時間の概念、方角や速度に至るまで物理的な思考がまったく通用しなかったのだ。

『初めて見るな。本当に空は青く見えるのだな。』

「ん。言つたる？暗いのは夜だけだつて。」

そう、朝を迎えるのも初めてだというのだ。

それが本当なら、昼は真っ暗な場所にいたか、地球の半径から計算して、最低でもマツハ1・5で延々と夜の部分を飛び続けていたか・・・だ。

今まで自分が信じてきた世界が崩れ去りそんな予感さえする。誰だ。科学は人類を飛躍的に進化させたなんて言つたヤツは。科学はどうやら世界を知るツールとして万能でないらしい。

「まあ、いいか・・・。」

参考書に記された物理法則よりも、今はっきりと存在する目の前の

現実を

信じよう。俺の脳に異常がない限り、これは現実なのだから。

ところで、この鳥は食事を必要とするのだろうか？

必要ないんじゃないか？随分非常識な存在みたいだし。

と勝手極まりない意見を頭に浮かべる。

初めての朝に彼は興味深々のようだ。

くっ、くっ、と頭を動かして外の景色や空を眺めている。

ん？そもそも彼でいいのか？彼女か？

もしくはそのどちらでもないのだろうか。

どちらでもよい気がするので、とりあえず“彼”だとしておこう。

そんな彼は不意に体をこちらに向けなおして、

『少し、空腹を感じるな。』

と言い放った。

食べるのか。予想が外れた。

「へえ。飯は食うんだな。」

と率直な感想を漏らすと、少しむっとしたような感じで彼は答えた。

『モノを食わねば生きていけない。当然のことであろうっ？』



いや、俺の常識フィルターはあなたのお陰で既に完全崩壊ですから。

そしてアナタに常識を説かれると少し複雑な気分になるね。

少し頭を掻いて考えた後、とりあえずまあ台所に行けば何かしらの事の進展はあるのではないかと思いい共に台所へ向かうことを促した。

自分の腹ごしらえもしたいところだ。

ひんやりする床を素足で感じながら数歩歩いたところで鳥が窓から動こうとしていないことに気づく。

「ん？どうした？」

『空が重くて飛べない。これは何故か？』

あー……。。

もう何があっても変だと思わないことにしよう。

言動の意味は理解できないが、とりあえず動けないのでどうにかして欲しいという意味は受け取った。

鳥を持ち上げて肩に乗せ台所に向かうことにした。  
垂り尾が地面につきそうだったので、踏まないように  
気をつけながら。

この絵はなんだか面白いな。前にどこかでこんな  
構図の物語を見た気がするが、どこだったろうか。

そしてなんとか、彼の空腹は水で満たされたようだ。

こちらがトーストにジャムをつけて頬張る間、グラスに注いだ水を  
飲んでいる彼の姿を見やる。

・・・それだけ見るとただの鳥にしか見えない。

食事の後もやはり飛べないと主張するので、また肩に乗せて部屋へ  
と戻る。

さあ、昨晚は質問攻めにされてしまったが今度はこちらが  
色々と聞く番だ。

『ところで、アナタは何者か？』

部屋に入るなり、肩に乗ったままの状態で彼が問いかける。

あれ？

俺のターンじゃないの？

そして、俺が何者かだつて？

俺は、人間・・・だよな？それとも、職業とか  
そういうことを答えればいいのか？

疑問符だらけの思考の中、とりあえず部屋のソファに  
どかっと腰を降ろして質問の真意をはかる。

ちらっと時計をみるとすでに時刻は昼をまわっていた。  
やはり昨日の夜更かしが効いたようだ。

軽く腕を組んでソファに沈み込む昼下がりに。

おそらく、人間だ。と答えたところで

“人間とは何か”なんて哲学者もびっくりの問答が  
始まるに違いない。そんなものに答えられるのは

悟りを開いたお偉い方々だけであろう。

そこで昨夜の彼の解答を真似て答えてみることにした。

「俺？俺は時間の中を旅してるんだよ。」

『時間・・・ああ確か、触れることも出来ず

ただ止まらず流れていくものであるっつ？』

「そう、それ。昨日話したやつ。」

『だがしかし、触れられないものであるのに、  
中にいるとどうやって認識するのだ？』

「それは・・・。」

迂闊だった。

こんな形で問答が始まるとは思ってもみなかった。矢継ぎ早に質問がとんできた昨夜の様子を思い出して少しげんなりしてしまう。

しかし、ここで負ける訳にはいかないのだ。とはいえ、なかなか回答に困る質問だ。

そもそも解答がない気がする。

少なくとも、自身の中に明快な答えは用意できない。考えれば考える程、思考の枠に捕らわれていく気がする。結局、悩んだ挙句にでた答えはといえば

「・・・なんでだろうな？」

の一言。

普段、日常的に本を読むのが生活の一部になっているせいか、先人が紙の上に遺した文句や文言はよく目にすることが出来る。

先ほどの時間を旅する云々の言い回しもそうだ。以前に読んだ本からの引用で、いい得て妙なり。と感じたからこそ日常で言葉にすることが出来るのだが。

真にその言葉を理解しているとは言い難い。

それ故に、根底を問われた時に言に詰まるのだろう。

彼は不思議そうな顔をして肩口からこちらを覗き込んでいる。  
人とは何か。時間とは何か。

そういった根元的な性質を持つものを思索に依って捉えるのは  
非常に難しいことだと思っている。

答えが出せないのではなく、答えが出ないからだ。

少なくとも、自身の力では。

そういった思索が好きな人もいるのだろう。

「・・・ただ、な。俺は苦手なんだよ。」

『何のことであるっ?』

食事からこつち、延々と肩に乗り続ける彼を  
再び窓際の棧に置いて言葉を続けた。

「そこにあるものはそこにある。」

理由なんかなくていい。それを由しとしたいんだよ。」

そうでもなければ何も出来なくなってしまう。

それほどまでに

『不安定なものなのだな。』

そう。

それ。

「だからいいんだよ。」

皮肉っぽく笑ってみせる。

『そういうものであるのか。』

「そういうもんだ。」

人類の正体なんかは、哲学者にでも任せておこう。

積み上げてきたモノや知識が正しくないなんてことはそんなに珍しいことではないと思う。

現に今がそうだ。

それよりも。

「そっちの話聞かせてくれない？」

隣の芝生は青くみえると先人は言った。

確かにそうだ。自分と違う日常を持った彼を前に、今までのそれは

随分と色褪せて見える。

聞いたところできつと実生活に役立つ直接的なものはないだろう。

しかし。

それでいい。

それがいい。

いつの間にか日は落ち、針のように尖った月も  
そそくさと地平線に沈んでいた。

いつの間に・・・と思ったが、  
慣れない思考をしていればそんなものかもしれないと思い直して  
彼の話に耳を傾ける体勢をとった。



俺はまるで、寝る前にお伽話を聞く子供のようだ。

くすっ

と小さく笑みが零れる。

『何を笑っている？』

『や、なんでもない。』

きつと、今日も夜更かし確定だろう。

満月まで、あと13日。

## 三日月が沈んでも

嘘も真実もコナゴナにしちやえば分からなくなるよ

どこかの歌で誰かがそう歌っていた。

そもそも、その二つは同じものであるような気がする。

今日は、あらためてそれを思い知らされた。

『不思議なものだな。』

不意に、彼がそう呟く。

視線は窓の外、尖月を越えて少しだけ明るさを増した  
三日月に向けられている。

「……ん？何が？」

読んでいた本から目を上げ、彼の発言の意図を確かめようと  
視線を送る。

彼は長く伸びた二本の垂り尾をゆらりと揺らせてこちらに  
向き直り、先を続けた。

『夜になると空は軽いな。』

そういつて音もなく羽を広げ、窓から俺の肩までの距離を  
さあつ、と滑空してみせた。

肩口に乗って、手に持った本を覗き込んでくる。

俺は、視界が狭くなる。と手でぐいっと彼の頭を押し戻した。

「夜だけは飛べるもんな。」

読書の邪魔をされまいと適当に相槌をうつ形で彼の質問に言葉を返  
す。

彼は、世にも珍しいしゃべる鳥だ。

数日前に出掛けた時に出会った。

昼は飛べずに、夜だけその羽を開いて飛ぶことが出来るらしい。

最初のうちはそれこそ一から十まで理屈や理由を

聞いてくるような彼だったが、どうやら家にある蔵書を

部屋の床には書物が乱雑に置いてあるので、それを

嘴やら羽やらで

器用にめくって読んでいるうちに

粗方の習慣や事象については把握したようだ。

ちなみに弁解しておくが、俺は読んだ本はキツチリと元に戻す人間だ。

床に散乱しているのは、本棚に入りきらない、

且つあまり普段は読むことのない本ばかりである。

そしてちゃんと部屋の隅に積んで置いたのだが、

彼があれよこれよと散らかしているのである。

と、というか文字も読めたんだなコイツ。

『それよりも不思議なことがあるのだが。』

相変わらずぐいぐいと頭を俺の前に突きだしてくる。  
しつとりと夜色をした彼の頭で視界が狭い。

これは読書を断念するより他にはないようだ。

観念してパタンとハードカバーの書物を閉じて

彼の質問に答える姿勢を示すと彼が肩から本の上へと自分の居場所を移し、見上げるような形で問いかけてきた。

『どの書物にも、星の電話のことが書かれていないのは何故か？』

「……は？」

えー……と。

何だつて？星の電話？

それはお洒落雑貨屋さんなんか置いてあるような

星の形をした電話機のことか？

それならば通販カタログにでも載っているだろうが違うものだろう。

なんともまあ相も変わらず回答に困る物言いをする鳥だ。

こちらが知らないのだから、まずは星の電話が一体何処の何者なのかを

聞かなくてはなるまい。率直に彼に問いただすことにした。

星の電話とは何かと聞いた俺に対して彼は少し驚いた様子で、

『星同士の相互通信手段に使われるものであろう？  
先日も望遠鏡とやらで見ていたではないか。』

と告げた。

残念ながら、先日は天体観測をしていただけだ。

「や、あれは星を見てただけで、電話のことなんか知らないぞ？」

『しかし、はっきりと星が瞬いていたであろう？』

「ん？ああ、空気が澄んでたからな。よく見えたな。」

『それが通信をしている最中だ。やはり見ているではないか。』

・・・そうだった。

コイツは常識の外にいる生き物だということを忘れていた。  
きっと、大気密度の違いによる光の屈折が星の瞬きの原因だと  
言ってもおそらく通用はしないだろう。

彼の言っている事は、絵本や児童書などでよく見かける表現に似ている。  
詩集などでも瞬きを“星のおしゃべり”と比喻しているものをいくつか見た記憶がある。

しかし、あくまでもそれは比喻の話であって、例え話だ。  
我が家の蔵書にそういった類いのものはないので、  
彼が、無いと主張するのも無理はない。

「あれか……。でも、電話なんか使って何をしゃべるんだ？」

『私も聞いた話だが……。』

と、そう言っただけで彼は星の電話に関する事を話し始めた。  
俺は大人しく聞き入る事にして、座っていたソファに深く座りなおした。

彼の話はこうだ。



星達は毎晩その日にあったことや思ったことを  
静かにおしゃべりするのだそうだ。

そのまましゃべっては賑やか過ぎてみんな起きてしまつから  
電話を使ってお互いに話をしあう。

どこの星が何を見たかの、

あの星とこの星が最近いい仲になつただの、  
逆にケンカして仲違い中だの。

まるで噂話のような話ばかりかと思えば、

流れ星になつて落ちていつてしまう星のために

それぞれが協力して最適な落下地点をサーチしたりもするらしい。

そうしなければ街や家にぶつかつて誰かに怪我を

させてしまつかも知れないから。

そうやって電話で喋る時に星はちかちかと瞬くそうだ。

「絵本そのものだなあ。」

話を聞いて、そう感想を漏らした。  
流れ星は地表に届く前にその殆どが燃え尽きる  
大気圏付近の宇宙のチリのようなものだから、  
そもそもが星ではない。

『絵本とは何か?』

「んー。つくり話を書いてある本のこと。」

そう答えると彼はまた首をくっ、と傾げる仕草をした。  
何か考えていたようで、しばらくしてから

『ならば、この家にある本は殆ど絵本なのだ。  
私が見たこともない話ばかりが書いてある。』

そう言われて、はっとした。

家にある書物は天文学や物理学などに分類される本が大半を占める。

そこに書いてある事象はこれまでに観測された事実や  
理論を基に書かれているものであり、揺らぐことのない  
科学の基礎……であるはずなのだ。

しかし、歴史が示す通り世の物理法則はいとも簡単に覆る。そうやって日々上書きされ今日に至っているのだ。

それならば現段階で確かに、物理法則や事象の事実は虚構である可能性もあるし、そもそも彼のような存在にとっては根拠のない作り話そのものだろう。

この夜色の鳥にとっては、“星は喋る”というのが真実なのだ。

普段のこちらの常識でもそうである。

同じ事象一つとっても、見る人間が変われば見えてくる真実は大きく違うことだってそう珍しいことではない。

例えば、絵本に夢中になる子供にとってはそこに書かれている内容は  
は  
真実だと認識されることもある。

誰もが一樣に納得できる真実など、無いのかもしれない。

ある人にとっては真実でも、ある人にとっては嘘かも知れないのだ。

「確かに、そういう意味では絵本かもな・・・。  
あ、いや前言撤回だ。絵本は絵がないとな。」

『そうか。それでもこれなどは絵本であろうっ？』

彼はそう言つと床に乱雑に置かれた書物の中の一冊に舞い移つた。  
題字には『鉱物図鑑』と書かれている。

タイトル通りの内容で、確かに各種鉱物の説明がカラー写真と共に掲載されている。学生時代に使っていたもので、  
所々マーカーで線が引いてある年代物だ。

確かに、絵はある。

まったく口の減らない鳥だ。

「ふふつ。確かにそうだな。」

『何を笑っている？』

「や、なんでもない。」

こうして今日も非日常を巻き込んだ俺の日常は過ぎていく。  
最早、その二つの境界線もあやしいものだ。

空に浮かんでいた燈色の三日月は知らず知らず沈んでいつの間にか  
見えなくなり、ほんのりと明るかった山際も夜に溶け込んで  
境い目を無くしていた。

満月まで、あと10日。

## 半月が照らす一羽と一人

例えば、赤い林檎がそこにあるとして。

『赤い』という単語と『林檎』という単語が揃って初めてそれは赤い林檎と成り得るのであって、言葉に因って世界を細切れにするのは、言語を扱うすべての存在にとって必然の行動である。

我々は、世界というものをこれでもかというほどに細分化して、パズルのピースを繋ぎ合わせるかのように世界を見る。

と、何かの本で読んだことがあるが、そもそもパズルの一部ではない

存在に対してはどのように接すればよいのだろうか。

とりあえず、観測者の立場を崩さない今の立ち振る舞いで間違っではないのだろうかと少し悩む。

しかし所詮、正しい答えなどないのだから悩むだけ無駄なのだ。

今日も夜色の鳥は俺の部屋で窓から月を眺めている。

順調に月は満ちて、緩やかな黄色を放つ半月へと姿を変えていた。彼の長い垂り尾が二本、窓の棧から床に着きそうになっている。あまりにじつと月に見入って微動だにしないものだから少し気になって、

「・・・生きてるか？」

と声を掛けた。

すかさず彼がこちらに振り返り

『生きている、とは何だ？』

と問いを返してきた。

だから、禅問答まがいの質問に的確明解に答えられるほど俺は出来た人間じゃあないのだ。解るはずがない。

「や、返事があるならそれでいい。」

危うく人間の本質にせまるトコロだった・・・。

質問責めの危機を適当に受け流して、ふと考えたことが一つ。

名前、つけといたらいいんじゃないか？

そう、この世には名前、という便利なものがあるのだ。

何故いままで気が付かなかったのだろうか。名前があれば呼ぶ度にいちいち質問をされなくても済むではないか。

不思議そうに首をくっ、と傾げている彼を見ながら

早速名前をつけようと頭を働かせる。

まずは・・・対象をよおく観察するとしよう。

これも不思議な話だが、ここ一週間、あまり彼を注視した事がない。

意識的にそうしていたのか、それともやはり常識外の存在はこちら側からすれば認識されにくいのか。

ともかく、相変わらず窓から月を見上げる彼をじっと見る。

体長は、30cmほど。  
普通の鳥のサイズと大差ない。

体色は、黒というよりは濃紺に近い夜のような色。  
半月に照らされて、月色に反射している嘴も同じように夜色だ。

特徴は尾羽から伸びる1mはあるつかという二本の垂り尾だろう。

ぱつと見ただけでは、カラスのようにも思えるその姿だが、  
不思議とイメージが合致しない。  
いや、どのような鳥類ともとれない印象をつけるのだ。  
それどころか、生物として何か違和感を覚えてしまう。

.....?

何がそう思わせるのだろうか？

確かに常識外もいいところなヤツではあるが.....。

.....。

.....!?



「……ああっ!!」

『何だ？騒々しいな。』

振り向いた彼の頭を見て確信した。

コイツ、目が無いんだ。何があっても驚かないことにしようと決めてはいたが、流石にこれには驚いた。

そして、気が付かなかった自分に少し反省を促してから、神話や想像上の鳥には総じてあまり眼が描かれていない事にも思い至る。そうしておく事で何処か一線を画したように感じられるからだろう。

今まで、何となく表情が読めないヤツだと思っていたが、気づいてしまえば当たり前前すぎるこの結論。

「……いや、すまん。何でもない。」

どうする？

名前は“目無し太郎”とかにでもしとくか？  
それとも“顔無し”とか？

……自分のネーミングセンスの無さに悶絶してしまう。  
ソファにどさり、と座り込んで失笑する。

『……？ おかしなものだ。』

彼に言われてはおしまいかも知れない。

「なあ、なんて呼んで欲しい？」

自分で名前を付けるのはやめておいた方がよさそうだ。直接交渉に入る。彼は首をくっ、と傾げてこちらを見つめている。いや、見つめているという表現は間違っているかも知れないがともかくこちらに顔は向いている。

「いや、名前が無いな。と思っ」

『それは駄目だ。』

即座に否決されてしまった。

「いや、名前が無いと何かと不便だと思」

『名付けは駄目だ。』

・・・とりつくしまもない。

便利だと思っのだが。いちいち言葉を選んで呼びかけなくても済むという勝手な都合ではあるが。

「・・・そんなに嫌か？」

『名前に縛られてしまうと飛べなくなるであろっ。』

そっいうもんなのか？

そっいうこと。にしておくしかなさそうだ。

まだ納得できていないような顔をしていたのだろっ。彼が補足するように言葉を続ける。

『言葉には力が宿るものであろう?』

ああ、それは分かる。

占いやらなにやらの本でもそう紹介されているし、言霊、という言葉もあるくらいだから。

それに、確かに意見や意思は言葉に乗せて相手に伝えるものだ。そこに関して異論はない。世の中には言葉を巧みに操る言霊使いなる人も存在するらしいが、残念ながら俺にそのような特異な能力はないようだ。

ならば別に名前をつけるくらい、何ともないような気がしてくるのだが、その旨を彼に伝えても

『言葉には、言葉であるだけで力を持つものがある。』

とのことだった。

名前をつけるという行為は即ち、相手の存在を自分の理解の下に細分化して取り置く行為なのだそうだ。

だから、名前をつけてしまうと自らの存在がそこに固定されてしまい、曖昧であった境界線が明確に引かれてしまう。彼の言葉で言うと、取り込まれてしまう。らしい。

普段、何気なく言葉を使っているだけに、あまり実感のない彼の話ではあったが、“名前をつけることで認識する。”という

言語の基本性質は理解できた。

これはどのような言語でもそうなのだろう。

見えないものが見えるようにするのが言語だし、

見えるものと見えないものの区別をつけるのもまた言語だ。

つまるところ、そんな括りで縛るなど

彼はそう言いたい訳だ。

・・・ならば、やはり彼を呼ぶ時には言葉を選んで

禅問答が始まってしまわないように気をつけるしかない。

何だか面倒臭いやつだ。

いや、前々から分かっていたことではあるが。

再認識、というやつだ。

言葉を選んで相手に気を遣うなど、いつ以来だろうか。

・・・ああ、初めて俺に彼女が出来た時は

相手の反応を見ながら恐る恐る言葉を選んでいたっけか。

不慣れながらアレコレ考えていたのをふと思い出した。

思えばあれも、相手という存在を言葉で自分の中に

細分化して理解しようとする行為だったのだろうか。

ならば、相手の存在の象徴である名前を呼ぶのに

緊張してしまう、というのも頷ける。

まあ、そういった類のものは  
理屈ではないような気もするが。

それを鳥相手に思い出す、というのも何だか  
シュールな話ではあるな。

こんな、眼すらない鳥もどきに。

「はは、変なの。」

『何を笑っているっ？』

「や、何でもない。」

半月は尚も明るく、窓から白黄の光を落としている。  
俺の日常はそのままに、曖昧な境界線でもって彼の存在は

確かに俺の周りにある。

それは、彼がこちらの日常に近づいているのか、それとも俺が今までの日常から離れたのだのか。

残念ながら分からないが、  
きっと分かったところで何の得にもなりそうにないので、  
あまり気にしないことにした。

満月まで、あと7日。

## 上弦の檸檬色

半月も過ぎて、月はまるで檸檬のよつに膨らみを増している。今日も変わらず名もない鳥は、すらりと長い尾を垂らしながら窓から月を見上げていているようだ。

俺はといえば、薄暗い明かりをソファの横に点けて相変わらず本を片手にその様子を眺めている。

夜色をした彼の軀は月明かりに照らされ明るく冷たい銀月色をぼんやり放っている。深い藍色が所々月夜のそれに変わる様は幻想的で見えていて飽きるものではない。

まるで、一枚のよく描かれた絵画を見ている気分さえさせられる。

いやはやなんと、文化人気取りをするようになってしまった。彼がこの家に来るまではそんな思考はしなかった。

あの新月から10日あまり。彼の影響を少なからず俺は受けている。

常識は常識でなく、日常は日常ではない。

当たり前と言えば当たり前前の事だが、そんな単純な事に気づくと人生は少しだけ面白い。・・・ような気がしないでもない。

それに気づかされたこの相手には感謝をしなければ  
ならないのかもしれないが、おそらく感謝するとか  
そういった類いのものではないのだと思う。

「もう少しだな。」

あと数日程で月は満ちるだろう。

その時にどうなるかは分からないが、きっと

この生活は元通りに、彼と出会う前の生活になるのではないだろう  
か。

彼がそう明言した訳ではないし、聞いてみた訳でもない。

ただ、ただなんとなくだが彼はいなくなる。

そんな予感はしているのだ。

彼は振り向いて、

『そうだな。』

と答えた。

わずかばかり月色の宿る羽を音もなく広げて

こちらへ向けてふわりと宙を滑って俺の座るソファの  
肘掛けに、やはり音もなくとまった。



羽ばたきの音くらいしてもよさそうなものだが、それすらもない。そのまま首をくっ、と傾げて彼は言葉を続けた。

『もう少しで今日も出前が届くのであるっつ。』

「・・・？」

あ、そういや今日もピザ頼んだな。や、そうじゃなくて。」  
持っていた本で窓の外を指す。

「月だよ。月。あと三日もすればお待ちかねの満月だ。」

『勘違いするような言葉は避けて欲しい。  
主語をはっきりさせてはくれまいか。』

む。可愛くねえなコイツ。

日本語は主語を省略できるんだよ。

そして、そこを察するのが日本民族の美徳感覚というものらしい。態度や視線などの所作から感情を読み取れ、ということだ。世界で見ても随分と特有な民族性だろう。

「言葉にしくなくても伝わる事ってのはあるんだよ。」

『伝わらなかったではないか。』

「分かってくれると思ったんだよ。悪かった。」

まあ、こんな意思のニアミスはよくある事だ。  
しかしピザはいつくるのだろう。

頼んだ事を忘れてはいたが、思い出すとそれはそれで気になる。  
急に空腹を意識したりもしてしまうのではないか。

隣にいる彼は水だけで事足りるのだからいいだろうが、  
俺は食物を摂取せねばならないのだ。

彼の、月明かりに照らされた体を見てそんな事を考えた。

・・・。

・・・？

「ん？」

『どじつた？』

彼が頭をくっ、と傾げてこちらを見上げている。  
彼の体が月色を帯びている。

いや、先程からそうだったのだが月明かりの届かないソファにいて  
も

変わりなく深い藍色の中に時折、銀月色の光沢が見てとれる。  
よくよく彼を眺めてみると、どうやら彼自身から  
月色はもれているようだった。

「驚いた。」

数日前までは確かに彼の体は夜色だった。

満月が近いからだろうか？彼の变化に少し戸惑ってしまっ。

『この場合、“だれが”という主語は理解できるが、  
一体何に驚いたのであるうか。』

「だって、驚くだろ？いつのまに体の色が変わったんだよ。」

『少し前からこうだったではないか。変化に疎いと  
アナタの社会では困るのではなかったか？』

む。

社会の枠組みの中で生きてない奴に言われたくはない。  
しかし随分と俗な知識を身に付けだしたなコイツ。

「どこ情報だよ……。」

まあ、間違ってないけど。」

それにしても。

「今までカラスの親類か？とか思ってたよ。」

カラスは知能が高いと言うからその親類、あるいは祖先か  
変異種かなど勝手に推測していたのだが、どうやら違っらしい。

『あれらと一緒にされては困る。』

あれらとはとうに袂を分かっている。』

彼が羽を広げて反論をした。

少し憮然とした声になっているような気がする。

彼にも感情というものがあるらしい。

めずらしい、というか初めて見た。

「驚いた。」

感情があることもさることながら、自分の推測があながち間違っている  
は  
いなかったことにも素直に驚いた。

なかなか鋭い洞察力じゃないか。俺。

しかし、そんな俺を尻目に彼は続けた。

『かつては確かに同じものだったと聞くが、  
あれらは陽を追い、われらは月を追った。  
結果、あれらは陽で灼け焦げてあの姿。  
あのような姿になっては何もできないではないか。』

60

はあ、そうなんだ。  
と、どうかカラスって太陽を追ってたのか。  
まるでイカロスだな。近づきすぎて自滅するところなんか特に。  
分不相応な事はしてはいけない。という日本の謙虚精神を  
よく現しているではないか。

しかしながら、その謙虚神話も時代の流れと共に  
崩壊しかかっているような気がするが。  
・・・いや、違うな。

「不変なんてものはそもそも無いしな。」

『そう、かつては同じであったというだけの話なのだ。』

まったく会話が噛み合っていないと思いつつも

訂正するのも面倒なのでそのまま流しておくことにした。

最後の台詞は独り言に近かったしな。

完全に別のことを考えてたし。

これで会話が噛み合う方が奇跡だろう。

ソファの横でいつになく活動的に動く彼を見ながら、

こうしてみるとそんなに遠い存在とも思えないな。

などとふと思つ。

喜怒哀楽の感情の幅を垣間見たからだろう。

彼が随分と“こちら寄り”に感じられた出来事だったと言える。

冷静に考えれば彼は確かに未知の類いのだが、

俺はすでに知ってしまった以上、未知とは言い難い。

そして今日の一件で随分と人間臭い所も見せてもらった。

まだ何かぼやいている彼の頭をポンと撫でて

俺は読書を再開することにした。

『何を笑っている？』

「や、なんでもない。」

俺も変わったと思うが、彼もまた変わったのではないだろうか。互いの日常を知ればそこには少なからず変化があるのは当然だろう。

ゆっくりと昇ってくる檸檬形を窓の外に眺めながらそれにしてもピザはまだだろうか。などと考えていた。

満月まであと3日。

## 満月が照らす天辺

地平線から、黄褐色の真円が顔を覗かせる。  
上昇するに従ってその鈍い錆を落とすかのように  
白銀に輝いてくそれを俺はただただ見つめていた。

あの新月の日からおよそ二週間。

偶然出会った夜色の奇妙な同居人は、  
数日前までは夜色だったその体を、満月に備えてか加速度的に  
見事な白黄色へと変化させていた。

無論、長く伸びた二本の垂り尾も月色に染まっている。

「いやはや、変われば変わるもんだな。」

独り言のようにそう漏らす。

目に見える変化だけをざっと見てもここまで変わっているのだし、  
出会った頃に比べれば彼の知っている事も随分増えたのでは  
ないだろうかと思う。

俺も随分と変わった。

たった二週間の出来事が随分と密度の濃かったものであることを  
示すかのような変化といってもいいかも知れない。



彼が、こちらを向いて話しかけてきた。

『「いつ、思ったことがあるのだが。」』

「ん？」

『いつか、月を追っていると話したことがあったであろう？』

「ああ、山の中でそう聞いたな。」

初めて会った時に、彼は確かにそう言った。  
何故追うのかは分からないと言った。

そんな彼の前に、月の象徴とも言える満月が姿を現したのだ。  
彼は月に追い付いた。といえるのではないだろうか。  
現に、彼の体はこうして不可思議ともいえる変化を起こしている。  
ここからどうなってしまうかなど全くもって予想もつかない。

そんな中で彼は言葉を続けた。

『追う、というよりは待つ、に近い行動だったと思うのだが』

それは良いのだろうか。どうであろうな。』

「……いいんじゃないか？月は月だし。」

全くもって予想もつかない問い合わせだった。

確かにこの二週間、彼はただずっと待っていただけではあるが……。

正直、そんなことどうでもいいんじゃないだろうかと思ってしまう。

『ふむ。小異を捨てて大同につく、というやつであるうが。』

「……あー。ま、そんなとこだな。」

よくよく、知識の偏りの激しい鳥だ。

きょうび誰も使わないぞそんな言葉。

思い出すのに数秒かかったじゃないか。

『ならば問題はないな。ゆるりと月を追うとしよつ。』

「ん、気を付けてな。」

ソファから立ち上がって、窓を開けようと鍵を外す。

かちや

鍵は、無機質で少しさみしそうな音をたてた。  
少し躊躇ったが、一呼吸おいてそのまま窓を大きく開け放った。

ひやりと冷たい風が頬を撫でる。

窓の外の月はより一層その身を銀へと輝かせていた。  
月明かりの冷たい銀白色はずいぶん無機質で、  
それが外気のせいなのかどうかはよく分からなかった。

「・・・お待ちかねの満月だな。」

そう言っつて部屋を振り帰ると  
室内に彼の姿はどこにもなかった。

「おっと。意外と薄情だな。アイツ・・・。」

別れの言葉くらい言わせてくれてもよかったのではないだろうか。  
確かに、何と声を掛けようか迷っていた所ではあるが、  
仮にも寝食を共にした同居人だ。  
ん？同居鳥か？

まあともかく、彼は別れの言葉もなしに行ってしまった訳だ。感謝の言葉くらいあってもいいと思うんだがな。もっとう、感動的な別れというか涙ながらの別離というか。いや、涙は別にいいか。ともかく、文の終わりに句点がくるように区切りにはちゃんと区切りらしい行動をとりたいと思う。せめてそれまではいてくれてもいいものを。

窓の外、真円の月を眺めながら俺は別れの言葉を……。

……。

……。

「……何て言おう。」

別れの言葉はそれこそいくらでもあるが、どれもじっくりこない気がする。彼はそもそもこちらの日常の存在ではなかったのだから。ほんの一時、こちら側に立ち寄っただけなのだろう。羽休め。というやつだ。

さよならというのも何故か白けた感じだし  
あばよとサラリと送ってみるのも

「……何かチガウな。」

『何が違うのであるっ？』

「戻る気になりゃいつでもおいでよ。なんて言わねえよって話だよ。」

『ふむ。寝たふりしてる間に出て行くつもりなどないのであるが。』

「って、いたのか。」

何事もなかったかのように、月を見つめる俺の背後から彼の声が聞こえてきた。

「もう行ったのかと思った。」

『ずっとここにいたであるっ？』

「は？」

彼が首をくっ、と傾げてさも当たり前というように答えた。

・・・確かにさっきはいなかったと思うのだが。  
そしてそれよりも彼が分かりにくいユーモアを理解できた事に  
素直に驚きを禁じ得ない。

『アナタが私を見なくなったただけだ。  
世界の接点の繋がり程脆いものはない。』

「そういうもんなのか？」

『そういうものだ。』

よく分からない。  
解らなくともよいと思う。  
世界の理など、知ったところで大したものではない。  
一枚絵のずれた向こう側の話など、こちらでは空想の産物に  
近いものがあるだろう。

『何を小難しい顔をしている？』

「え？ああ、悪い。なんでもない。」

やめたやめた。

答えのない事象を考えるのは哲学者の仕事だ。

決して俺のライフワークではない。断じてない。

「そろそろ行かなくていいのか？」

月はもうすっかり天辺へと昇りつめて、明々とその冷たい光を落とし込んできている。

彼が音もなく俺の横へ、窓枠の上へとその身を移した。

月明かりに照らされた一人と一羽の影は

無機質な光とは裏腹にぼんやりじわりとした夜色でまるで物語の挿し絵のように床に映っている。

『名残は惜しいが、そろそろ行くとしよう。』

「ん、楽しかったよ。この二週間。」

『お互い様であろう。』

そういつて彼は羽を大きく広げかけて言葉を続けた。

『・・・迷惑をかけるが、窓はしばらく開けておいた方が  
よいかと思われる。』

「？」

迷惑をかけた。の間違いじゃないのか？  
不思議に思ったが、聞き返すよりも早く彼は  
その月色に光る体を夜に滑らせて  
真っ直ぐに銀白色へと向かっていった。

彼の姿がそれに溶け込んで見えなくなるまで、  
それほどの時間はかからなかった。

今度こそ、彼は月を追っていったのだろう。

「さて。ピザでも頼むかな・・・。」

そう呟いて部屋を振り替えると、  
床に夜色の影がぼんやりじわりと映っていた。  
一人と一羽の挿し絵のような夜色の影。

奇妙だと思うより早く、彼の落としていった影は  
絵画から抜け出るように膨らみ、彼と寸分違わぬ形になった。



しっとりとした夜色。  
紐のように長く伸びた二本の垂り尾。  
彼そのものだ。

「え……と……。」

影から生まれた夜色は、こちらの混乱などおかまいなしというよう  
に

羽を広げて、室内を飛び回った。

本棚から本は落下し、ソファテーブルに置いてあった  
グラスは倒れて中身がこぼれた。

必死で何かを探しているかのようにも見える。

ひとしきり飛び回った後、夜色はこちらに気づいたのか  
俺の正面で首をくっ、と傾げてみせた。

「お前の“元”ならあつちだと思っぞ。」

窓の外、夜空に浮かぶ真円を指差してそう告げた。  
理解したのかしていないのか、夜色は窓の棧に移って  
じっと月を眺めている。

「ははっ、随分散らかしてくれたなあ。」

なるほど確かに迷惑をかけてもらった。

これを片付けるには随分と骨が折れそうだ。

窓際で夜色が振り返り、首をくっ、と傾げながらこちらを見た。

「や、なんでもない。」

片付けくらいのんびりやるぞ。

ソファに座り込んで部屋の現状を確認していると

夜色はふいとどこかへ飛んでいった。

「さて、と。」

なかなか愉快的な置き土産だったが、これを片付ければ  
すっかり元通り。だ。

随分と色々なことがあったと思う。

些細で重要な少しばかり非日常な生活。

過ぎ去ってしまえばまた何も変わらない世界が巡るのだろう。

ただ一つ違うのは、

日常を、日常として感じながら世界にいるということだろう。

ちょっとした寄り道だったと思っておこう。

その寄り道も終わりを告げた。

とりあえずグラスを戻しながら、何となくだが明日からの日常が少しは面白いものに思えそうな予感はある。

夜の天辺には、ひっそりと静かに白銀が夜を照らしていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4799ba/>

---

月追鳥

2012年1月13日02時47分発行